

プレスリリース
2021年8月23日

須田剋太 抽象

2021年8月23日（月）－9月4日（土）

この度、思文閣では、須田剋太の抽象画の世界をご紹介します展覧会を開催いたします。須田剋太は、1940年代のはじめにその拠点を関西に移し、戦後の精力的な活動を通じて国内外に特異な存在感を示した画家です。長谷川三郎や、吉原治良、津高和一、そして森田子龍といった関西の美術家たちとの交流はよく知られていますが、一方で、吉原からの具体美術協会への誘いを断ったことでもわかるように、頑として我が道を突き進んだ無二の画家でした。

須田剋太が抽象表現に本格的に取り組んだのは、1948、49年（昭和23、24）頃から70年代にかけてのことでした。本展出品作品のうち、年記が確認できるものは1959年から65年に分布しており、それ以外の作品についても1960年前後から70年頃までに描かれたものと考えられます。多様な形式をとり、多彩な技法を用いる須田剋太の抽象作品群を整理分類することは簡単なことではありませんが、いずれの作品にも共通しているのは、絵画につきまとう二次元という制約との格闘のあとが見出せることであると考えられます。

須田にとって、絵画の平面性とは、何がなんでも超えなくてはならない障壁であり、画面に三次元的な広がりを作り出すため、彼は、絵の具を厚く塗り重ねて盛り上げることに加えて、小石や砂利といった物質を画面に導入しています。さらに特徴的な技法として、画面になんらかの物体を押し当て、円形や方形の押し痕や張り出しを作り出すエンボスの手法が指摘できます。こういった工夫がふんだんに盛り込まれた須田剋太の抽象画をみると、その制作は「絵を描く」というよりも、「三次元性を帯びたモノを造る」といったほうが適切であるように思われます。そうして造りだされた「モノ」は、具象絵画のように外界のなにものかを写しとったものでも、作家の精神世界を具現化したものでもありませんでした。その「モノ」自身として現実に存在し、それ自体以外のなにものでもない「モノ」だったのです。

思文閣

須田剋太 (1906–1990)

洋画家。埼玉県生。本名は勝三郎。文展・日展をはじめ現代日本美術展・国際展等で活躍する。力強く奔放なタッチによる生命力のある表現が異彩を放つ。書・陶芸でも知られる。また司馬遼太郎の「街道をゆく」の挿絵を担当、講談社出版文化賞を受賞した。国画会会員。平成2年（1990）歿、84才。

思文閣の理念

我々思文閣は日本の優れた文化を育み、伝え、広める事により一人でも多くの人々に感動と豊かな心を与え続ける企業を目指します。

伝える

日本美術・古典籍の販売、出版事業を通して、今日まで伝わってきた日本の優れた美と英知を、皆様と共有したいと願っています。歴史に埋もれた美術品や文献を見だし、正當に評価したうえで、価値のあるものを後世に伝えてまいります。

広める

専門スタッフによる丁寧な調査・研究をおこない、皆さまにより広く、より深く、ご興味をもっていただきたいと願っています。また、メディア等を通じて、一人でも多くの方が日本美術に触れられる機会を増やしたいと思います。広く世界に向けて、日本で育まれた素晴らしい文化を発信したいと願っています。世界で認められてこそ、文化はその価値を確固たるものにし、強い生命を得られると思うからです。

育む

知る人ぞ知る実力派の作家や新鋭作家の創作活動に光を当て、広く紹介したいと願っています。また、世界的に高く評価されてきた日本の工芸作品を取り入れた新しい現代空間をご提案したいと思っています。出版事業においては、若手や在野研究者の成果を世に問い、学術コミュニケーションを支えたいと思っています。さらに、日々の業務や教育を通して、日本文化の伝播や伝承を担う人材を育むよう努力しています。

SHIBUNKAKU

思文閣

思文閣

京都

〒605-0089

京都市東山区古門前通大和大路東入元町355

Tel: +81-75-531-0001

銀座

〒104-0061

東京都中央区銀座5丁目3番12号 壹番館ビルディング

Tel: 03-3289-0001

Email: shop@shibunkaku.co.jp